

日韓語の「モダリティ」の機能に関する比較類型論的研究

守屋哲治* 姜 奉植** 堀江薫***

*金沢大学教育学部 **岩手県立大学総合政策学部

***東北大学大学院国際文化研究科

moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp bs-kang@iwate-pu.ac.jp khorie@intcul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

日本語の終助詞の中には、命題内容を談話参与者である話し手が聞き手にどう提示するかを表す機能を持つものがある(Maynard 1993)。しかし、韓国語でこのような談話語用論的機能を持つ文末詞は日本語ほど発達していない(Horie and Taira 2001)。その一方で命題内容に対するモダリティを示す機能を持つ文末詞は韓国語において日本語よりも発達している。本論文ではこれらの対照が、韓国語においては、命題内容により密接に関わる否定形式が2つ存在しているのに対して、日本語(標準語)においては1つしか存在していない(Moriya and Horie 2002b)という、否定形式の分化の違いとも相関していることを指摘する。最終的には、両言語のモダリティの体系は多くの共通性を見せながらも、文法のほかの分野における両言語の相違とも相関する、一貫した相違を見せることを論じる。

2. 日韓語のモダリティ比較

本節では主としてHorie and Taira (2001)に基づいて、日本語と韓国語のモダリティ体系の比較を行う。2.1.では命題内容に対するモダリティ体系、2.2.では談話的モダリティの体系の比較を行う。

2.1. 命題内容に対するモダリティ

韓国語研究者の間では、どのような現象をモダリティとするかに関しては議論がある。Sohn (1999: 354)によれば、韓国語では接尾辞は非終端接尾辞(non-terminal suffixes)と文末詞(sentence enders)の大きく二種類に分類される。文末詞は「文のタイプ」(Sentence-Type)だけでなく、6種類の発話レベル、と「ムード」("mood")を表す。「ムード」とは命題内容を客観的事実として提示する「直接法(indicative)」か、直接経験した事実として提示する「回想法(retrospective)」か、あるいは要求として提示する「要求法(requestive)」を示し、「文のタイプ」は文が果たす発話行為の種類、すなわち、断定(assertion)、疑問(interrogative)、提案(propositive)、命令(imperative)を示す。表1は韓国語のindicative moodの文末詞を挙げたものである。

表1 Indicative-Mood Sentence-Enders in

Korean (based on Sohn 1999: 355; partially modified)

	Declarative	Interrogative
plain	-n/nun-ta	-ni?/-nu-nya?
intimate	-e/-a	-e?/-a?
familiar	ney	-na?/-nu-nka?
blunt	-(s)o	-(s)o?
polite	-e.yo/-a.yo	-e.yo?/-a.yo/
deferential	-(su)p-ni-ta	-(su)p-ni-kka?

	Imperative	Propositive
plain	-e.la/-a.la	-ca
intimate	-e/-a	-e/-a
familiar	-key	-sey
blunt	-(u)o	-(u)p-si-ta
polite	-e.yo/-a.yo	-e.yo/-a.yo
deferential	-(u)si-p-si-o	-(u)si-p-si-ta

Horie and Taira (2001: 180)

表1において太字で示した部分は indicative と requestive の「ムード」接尾辞が明示的に表われているが、その他の部分では「文のタイプ」を示す接尾辞と融合している。

一方日本語においても屈折接辞の分析に関しては多くの議論がある(Shibatani 1990)。表2は現代日本語の子音動詞「死ぬ」(sin-u)と母音動詞「見る」(mi-ru)の活用表である。

表2 Standard inflectional categories and their endings for Modern Japanese (Shibatani 1990:232; the paradigm for copula is omitted)

Mizen (Irrealis)	sin-a	mi-φ
Renyoo (Adverbial)	sin-i	mi-φ
Syuusi (Conclusive)	sin-u	mi-ru
Rentai (Attributive)	sin-u	mi-ru
Katei (Hypothetical)	sin-e	mi-re
Meirei (Imperative)	sin-e	mi-ro/yo
Sikoo (Cohortative)	sin-o	mi-yo

Horie and Taira (2001: 181)

表2の屈折語尾の中には「命令」、「志向」のようにモダリティ的な意味を持つものもあるが、「未然」や「仮定」のように間接的にモダリティに関係するものの、これらの屈折語尾自体がモダリティを担っているか疑わしいものもあり、さらに「連用」、「終止」「連体」などはモダリティの意味

に関係するかどうか自体もはっきりしない。

以上の考察から、韓国語では命題内容に対するモダリティを表す体系が精密化しているのに対し、日本語では命題内容に対するモダリティを明示的に表す屈折語尾がわずかしかないことがわかる。

2.2. 談話的モダリティ

命題内容に対するモダリティに対して、談話機能に関するモダリティが存在し、modal particlesと呼ばれる形式によって表わされる。この談話機能に関するモダリティはMaynard (1993)によってDiscourse Modalityと名付けられ、以下のように定義されている：

Discourse Modality refers to information that does not or only minimally conveys objective propositional message content. Discourse Modality conveys the speaker's subjective emotional, mental or psychological attitude toward the message content, the speech act itself or toward his or her interlocutor in discourse. Discourse Modality operates to define and to foreground certain ways of interpreting the propositional content in discourse(...).

Maynard (1993: 38-9)

日本語におけるDiscourse Modalityの具体例として、終助詞が挙げられる。日本語の終助詞のDiscourse Modalityの研究はKamio (1994)などに代表される神尾昭雄の「情報のなわばり理論」をきっかけとして最近特に注目されるようになっていく。

McGloin(1990)は「情報のなわばり理論」に基づいた終助詞の情動的語用論機能の分析を行っているが、それによれば、終助詞「ぞ、ぜ、さ、よ」は、話し手の領域にある情報を聞き手に示す機能を持つのにに対し、「な、ね」は聞き手の領域にある情報を話題にする時に用いることができるとして、このような働きの違いが、「*おまえは昨日休んだぞ/ぜ/さ/よ」と「おまえは昨日休んだな/ね」の容認可能性の違いを生じさせている(McGloin 1990: 25-26)。

「よ」と「ね」についてもKamio (1994)、Maynard (1993, 1997)などによって複雑な機能分担の実態が明らかにされている。Maynard (1997: 88)によれば、「よ」は、話者のほうが情報により近いあるいは情報を持っていて、その情報に焦点を置きたいと考えていることを示しているのに対し、「ね」は話者が聞き手よりも情報に近くなく、情報よりも感情に焦点を置きたいと考えていることを示していると分析しており、(1a,b,c)の意味の違いもこれによって説明できるとしている。

- (1) これといって原因になるようなできごとがあったわけではないと思います (a) ϕ /
(b) よ / (c) ね
((1b)はMaynard 1997: 121, (1a, c)はHorie and Taira(2001: 184)

(1a)は直接的な断定だが、(1b)は話し手の確信を聞き手に伝える意味合いが加わっており、(1c)ではさ

らに命題内容を聞き手と共有しようとする態度が表われている。

以上見てきたように日本語では談話的モダリティを表す終助詞の体系は、命題内容に対するモダリティに比して発達していることがわかる。

これに対して韓国語では、日本語とは逆に談話的モダリティを表す助詞は命題内容に対するモダリティを表す体系に比してあまり発達していない。韓国語の終助詞の中で談話的モダリティの機能を果たしていると考えられるのは、(2)に用いられているような「確認」の働きを持つ-ciのみである：

- (2) A: Wuli kotunghakkyo colepha-kwu
we high school graduate-since
chem-i-ci?
first time-COP-SE¹

“(This) is the first time we (met) since graduation from high school, right?”

- B: Chem-i-ci. Ya, ne hana-twu
first time-COP-SE VOC you one-even
an pyenha-yss-ta.
NEG change-PAST-DECL

“(It) is the first time. Hey, you haven't changed a bit.”

(H. Lee, 1999: 243; emphasis added)

このような日本語と韓国語の違いはHawkins (1986)の意味類型論的概念を用いることによって説明できる。Horie (1998), Horie and Kang (2000), 堀江(2001), Moriya and Horie (2002a, b)などで明らかにしている通り、日本語は形式の多機能性を志向するのに対し、韓国語は形式と意味を1対1対応させる傾向にある。日本語では、命題内容レベルに多義的な機能を果たす形式が多くなるため、談話レベルでは多義の解消に文脈に依存する割合が高くなる。その一方で、韓国語では命題内容レベルでの多義性を少なくする一つの現れとして、命題内容に対するモダリティの体系が精密化しているが、その分、文脈依存の割合が少ないために談話レベルのモダリティが発達していないと考えられる。

次節では、命題内容に対するモダリティの一種として、日韓語の否定形式の対照研究をMoriya and Horie (2002b)に基づいて紹介する。

3. 日韓語の否定形式の比較

Moriya and Horie (2002b)では、日本語と英語の述部否定形式を比較し、文法化のプロセスの違いを明らかにしている。

韓国語では、述部否定の形式として(3a)のように、述部の直前に否定辞を置く short form (Type I)の否定と、(3b)のように述部の後に補文化辞をつけ、その後否定辞と代動詞を置く long form (Type II)の否定の二種類がある：

- (3) a. ape-nim -un an
father-HT -TC not

ka-sy-e.
go-SH-INT
'Father is not going.' (short form / Type I)

b. *ape-nim -un ka-ci*
father-HT -TC go-NOM (*lul/to*)
anh-usy-e.
(AC/even) not-SH-INT
'Father is not (even) going.'
(long form / Type II)
Sohn (1999: 390)

現代韓国語における二種類の否定の分布は、(4)に述べられている通り、Type IIのほうがType Iよりも生産的である：

- (4) "It seems that almost any sentence can be negated by means of Type II negation. ... Type I negation, on the other hand, is much less productive and evokes a quite variable reaction from different native speakers." Kim-Renaud (1974: 7)

また、歴史的推移に関しては、H-O. A Kim (1977)が明らかにしている通り、Type Iが古い形で、後にType IIが登場し、現在はType IIの使用頻度が高くなっている。しかし、Type IとType IIの間には機能的に違いが見られる場合がある：

(5) a. ??? *ikes-un say kes*
this-TC new one
an kath-ta.
NEG look-like-DECL

b. *ikes-un say kes kath-ci*
this-TC new one look-like-COMP
anh-ta.
NEG-DECL
"This does not look like a new one"
B. Kim (1991: 19)

(5)では、文脈上否定の焦点は述語ではなく、述語の補部にくる名詞句である。上記の例文でType I が不適切と判断されるのは、Type Iの否定が述語否定であるために、焦点が否定の作用域に入らないためと考えられる。それに対してType IIは文全体を作用域に入れることができるため、適切だと判断されている。このように、韓国語ではType IからType IIへと変化していても、Type Iの否定がType IIの否定と機能分化を起こして併存しているという状況を生みだしている。これは、韓国語において、形式と機能を1対1対応させようとする傾向があり、それが命題内容に対するモダリティのレベルにおいても、二種類の否定の機能分担による共存という形で表われているためと考えられる。

それに対して日本語では、(6)に挙げた例からも明らかのように、歴史的には韓国語と同じような発達をたどりながら、Type I

にあたる形式は現代日本語では用いられなくなっている。これもまた、日本語の多機能性志向が、命題内容に対するモダリティの一つである否定辞を多義的になるように発達させた結果であると考えられる。

(6) Old Japanese
a. *na yuki so.* (preverbal)
NEG go IMP
b. *yuki na.* (postverbal)
go NEG-IMP
Modern Japanese
c. *yuku na.* (postverbal)
go NEG-IMP
H-O. A. Kim (1977: 676-7)

4. おわりに

日本語の命題内容に対するモダリティは、動詞の接尾辞のレベルおよび否定辞のレベルのいずれにおいても韓国語よりも発達していない。これは、日本語が韓国語よりも言語形式の多義性を志向するという意味類型論的性質に起因すると考えられる。

その一方で、日本語の終助詞レベルで談話機能的モダリティが韓国語よりも発達しているのは、多義性の解消のために日本語が文脈により依存する言語であることが原因となっていると考えられる。

今後は、日本語と韓国語のモダリティの現象をより詳細に見ていくことによって本稿での主張の裏付けを行っていきたいと思う。

謝辞

本研究は、平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(C)「否定現象の文法化に関する研究：認知言語学および言語類型論の立場から」(課題番号 13610654)、および 21 世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」(東北大学大学院国際文化研究科)による補助を受けて行われています。

注

1. 本論文で用いる記号の意味は以下の通りである。

COMP: complementizer, COP: copula,
DECL: declarative, HT: Honorific title,
IMP: imperative, INT: Intimate speech level
suffix, SH: Subject honorific suffix
NEG: negation, PAST: past, PRES: present,
SE: Sentence Ender, TC: Topic-contrast
particle VOC: Vocative.

参考文献

- Hawkins, John A. 1986. *A Comparative Typology of English and German: Unifying the Contrasts*. Berlin: Croom Helm.
- Horie, Kaoru. 1998. "Functional Duality of Casemarking Particles in Japanese and Its Implications for Grammaticalization: A Contrastive Study with Korean," *Japanese/Korean Linguistics* 8, ed. by David J. Silva, 147-59. Stanford: CSLI.
- Horie, Kaoru, and Bongshik Kang 2000. "Action/State Continuum and Nominative-Genitive Conversion in Japanese and Korean." *Modern Approaches to Transitivity*. ed. by Ritsuko Kikusawa and Kan Sasaki, 93-114. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 堀江 薫. 2001. 「膠着語における文文化の特徴に関する認知言語学的考察：日本語と韓国語を対象に」山梨正明他（編）『認知言語学論考』東京：ひつじ書房, 185-227.
- Horie, Kaoru and Kaori Taira. 2001. "Where Korean and Japanese Differ: Modality vs. Discourse." *Japanese/ Korean Linguistics* 10, ed. by Akatsuka, Noriko, and Susan Strauss, 178-191. Stanford: CSLI.
- Kamio, Akio. 1994. "The theory of territory of information: the case of Japanese." *Journal of Pragmatics* 21: 67-100.
- Kim, Boomee. 1991. "The Acquisition of the Two Negation Forms in Korean," *Harvard Studies in Korean Linguistics* IV, 13-25. Seoul: Hanshin.
- Kim, Hyun-Oak Alan. 1977. "The Role of Word Order in Syntactic Change : Sentence-Final Prominency in Korean Negation," *Proceedings of the Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 670-684, Berkeley, California: Berkeley Linguistic Society.
- Kim-Renaud, Young-Key. 1974. "Variation in Korean Negation," *Language Research* vol. 10, 1-21. Seoul: Seoul National University.
- Lee, Hyosang. 1991. *Tense, Aspect, and Modality: A Discourse-Pragmatic Analysis of Verbal Affixes in Korean from a Typological Perspective*. Doctoral Dissertation, University of California.
- Maynard, Senko K. 1993. *Discourse Modality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Maynard, Senko K. 1997. *Japanese Communication*. Honolulu: Hawaii University Press.
- McGloin, Naomi Hanaoka. 1990. "Sex differences and sentence-final particles." In Ide, Sachiko, and Naomi, Hanaoka McGloin (eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kuroshio publishers, 23-41.
- Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2002a. "Grammaticalization and Semantic Typology: Time-relationship Adverbs in Japanese, Korean, English and German." *Language, Information, and Computation: Proceedings of the 16th Pacific Asia Conference*, 348-57. Seoul: The Korean Society for Language and Information.
- Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2002b. "On the Coexistence of Two Forms of Sentence Negation in Korean: A Functional Typological Perspective." Paper presented at the thirteenth Conference on Korean Linguistics (ICKL 13). University of Oslo, Oslo, Norway. July 8-10, 2002. (To be published in the conference proceedings.)
- Sohn, Ho-min. 1999. *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Language of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.